十 戦国時代の夜久野城

応仁の乱から時代も進んだ安土桃山時代後の戦国時代、但馬の山名氏も六分一殿と言われた隆盛期がすでに終わっていた。但馬守護職山名祐豊の時代である。山名家の一族であった山名豊直・豊次兄弟の内、兄の豊直が山名祐豊により夜久野城の城主となる。弟は大内城(磯部氏館)の城主とされた豊次である。山名本家により波多野秀光や秀治の息子波多野孫次郎の後見を受けたと山東町誌にある。磯部郷に移したので姓を磯部と改め、磯部兵部太夫豊直と称した。丹波合戦のおり、矢名瀬の槍術で名を挙げた武将、岡村秀清に祐豊と共に感状を与えている。(元亀二年・一五七一)秀吉の但馬侵攻に従い、のち因幡の用瀬城に移封になる。

以後竹田城に城主赤松広秀が入って、夜久野城には泥長左工門という武将を城主に置いたという記録もある。関ヶ原の戦いのあった慶長五年(一六00)広秀が鳥取城攻めの際の罪で自刃させられ竹田城が廃城になり夜久野城もこれに準じている。元和元年(一六一五)大坂冬の陣の後、徳川幕府の直轄領(天領)となり生野代官所の支配地となった。城は以来放置されてきた。昭和二十年代後半であったろうか雨が降らず水田耕作に困った磯部地区の住民が、各戸から薪を持ち寄って夜久野城の一番高い曲輪に集まり般若心経を唱えて雨乞いをしたことあった。現在は磯部地区の地域の共有地(財産区)としてスギ・ヒノキが植林され各地区で管理されている。

田倉山(宝山)から 夜久野古戦場を望む

